

## 解説

ピエール・ルモニエ (Pierre Lemonnier) 氏は、1948年フランス生まれの民族学者、現在はエクス＝マルセイユ大学 (Aix-Marseille University) の教授であり、また、フランス国立科学研究センター (CNRS Centre National de Recherche Scientifique) の名誉教授である。彼は1993年まで続いた *Techniques et Culture* 誌の創始者の一人であり、また「オセアニア社会のアイデンティティと変容」研究グループの指導者でもある。またオセアニア研究資料センター (Centre de Recherche et de Documentation sur l'Océanie) の主任でもある。



写真1 南山大学での講義風景  
(2015年1月31日撮影)

ルモニエ氏が2014年1月から2月にかけて、京都大学の東南アジア・アフリカ研究センターの招きで弟子筋のフレデリック・ジュリアン (Frédéric Julian) 氏とともに来日した折、南山大学人類学研究所でもセミナーをしていただいた。ここに翻訳した論考は講演の英文発表原稿に後日手を入れ、参考文献をつけていただいたものを訳出したものである。

ルモニエ氏はマルセル・モースが先鞭をつけ、先史学者のアンドレ・ルロワ＝グーランが発展させたフランス語圏技術の人類学 FTAT (Francophone Tradition of Anthropology of Techniques) の第一人者である<sup>1</sup> (e.g. Audouze 1999, 2002)。彼の学位論文はフランス国内の製塩業についてであった(1980)。海水から塩を作る製塩業がフランス国内で多様な技術過程をもっていることを動作連鎖あるいは操作連鎖、すなわちシェーン・オペラトワール (chaîne opératoire : 原義は「操作の連結」) を分析手法として分析したものである。

ルモニエ氏は1978年以来、モーリス・ゴドリエ (Maurice Godelier) らとパプアニューギニアの民族学調査を開始し、ゴドリエと密接な関係をもって多くの業績を残したことは本論文からもうかがうことができる。彼はまたブルーノ・ラトゥール (Bruno Latour) との共編著『先史時代から大陸間弾道弾へ：技術の社会的知性について』 (Latour and Lemonnier 1994) も公刊している。

ルモニエ氏は1990年代にフランスの研究者には珍しく積極的に英語圏との対話を行った(1986, 1989)。その端緒がケンブリッジ大学の考古学雑誌 (*An Archaeological Review from Cambridge*) における特集にフランス系技術人類学からは R. クレスウェル (Cresswell 1990)、および英語圏からは T. インゴルド (Ingold 1990) や N. シュランガー (Schlanger 1990) とともに英語の論文を寄稿している (Lemonnier 1990a)。それと前後して英語による初のフランス流技術人類学の教科書『技術人類学綱要』(1992) を著し、また『技術的選択』 (Lemonnier ed. 1993) の編著も行っている。

<sup>1</sup> FTAT という名称は次の論考などで使用されている (Naji and Douny 2009)。



写真2 南山大学人類学博物館にて  
(2015年1月31日撮影)

この1990年代前半はルロワ＝グーランの大著 *Le Geste et Parole* (1964, 1965) すなわち『身ぶりと言葉』(ルロワ＝グーラン 1973) が英語に翻訳されたこともあって、英語圏においてフランス技術人類学への認識が急速に進展した時でもあった(後藤 2012)。この後、英語圏でもシュランガーや M. ドブレスなどの考古学者が積極的にシェーン・オペラトワールの分析手法を導入した (Schlanger 1994, 2005; Dobres 1999, 2000)。またそれまで operational chain など

と訳されてきたこの概念を *chaîne opératoire* と原表現で英語の論文でも使うことが一般化した。そして当時まだルロワ＝グーランのこの大著に対する認識はなかったようであるが、*technique* と *technology* の違いを意識しながら社会現象としての技術という論点を展開していたのは T. インゴルドであった(1990, 1993)<sup>2</sup>。

一方類似の分析手法をとっていたマイケル・シファー (Michael Schiffer) ら米国の研究者と相互理解が始まったが、そのことにルモニエ氏は本論でもふれている。一方、シファーもフランス技術人類学の存在をこの時期に知り、このようなことは、自分たちはずっと以前からやっていたと述べると同時に、ルモニエ氏の言う技術的選択論について説明が不十分というような批判的見解を表明している (Schiffer 1994)<sup>3</sup>。

ところがルロワ＝グーランの翻訳、およびクレスウェルやルモニエの活躍によって英語圏にフランス語圏技術人類学の伝統を知られるようになった 90 年代前半以降、ルモニエ氏は技術論的な論考を書くのをやめてしまった。そしてしばらくは儀礼や象徴性あるいは神話などの論考を重ねていくことになる (Lemonnier 1990b, 2006)。彼が技術論からしばら

<sup>2</sup> フランス語圏技術人類学 FTAT (Francophone Tradition of Anthropology) では人類学という技術を意味する概念として、伝統的に *technique[s]* が使われてきたが、英語圏人類学 AA (Anglophone Anthropology: Naji and Douney 2009) では *technology* が使われてきた。一方フランス語の *technique/technologie* と英語の *technique/technology* には微妙な差があることはシゴー [Sigaut 1985, 1994] やインゴルド [Ingold 1993] の指摘で明らかにされている。筆者はルロワ＝グーランの大著 *Le Geste et la Parole* [1964, 1965] の翻訳本 (英訳 [1993]、独語訳 [1988]、二冊の和訳 [1973, 2007]) における *technique[s]* および関連する *technicit[é]* の訳語の文脈による訳語比較を試みている (後藤 2014)。

<sup>3</sup> シファーは自らの技術的連鎖論を行動考古学と呼んだが (Schiffer 1976)、実はそのアイデアの源泉は文化唯物論の泰斗マーヴィン・ハリスの初期的作品『文化的モノの性質』 (Harris 1964) に由来するのであった (1995)。ハリスは自分の妻の台所仕事とくに料理の準備は、さまざまな作業が平行して行われたり、合流したりする複雑な連鎖として描き出したのである。

く離れていた理由こそ本論で明らかにされるべき点であった。

じつはこれにはシファーが批判した点も無関係ではなかった。もともとルモニエ氏はアングやバルヤ族の行っている特定技術の採用について構造主義的な意味ないし記号論的な連関を見いだそうとしたわけではない。物質文化の文様などに個人ないし集団のアイデンティティあるいはコミュニケーション作用を直接的にみようとしたりした英語圏の民族考古学者の業績にも批判的であった(e.g. Wobst 1977; Hodder 1982; Wiessner 1984; Sackett 1986)。一方、ルモニエ氏は機能的に関連しない技術要素の組み合わせを「多義的」な意味を持つ「社会的な選択」であるとしたのである。しかしそれはルモニエ氏も本論で認めるように、何も言っていないのに等しかった。

シファーが批判したのはまさにこの点でもあった。シファーは彼の言う遂行的マトリクス(performance matrix)によって、なぜそのような選択がなされたのか説明すべきであるとする。ただしシファーの説明はたとえば、ある土器の形態が採用されるのは熱効率が有利なためであるというような技術的な次元だけではなく、女性たちが絶えず金属壺を綺麗に洗うのは視覚的あるいは象徴的効率のためであるとか、ある宗教的要素が選択されるのは、集団の結束を高める遂行的有効性があるからだ、という機能論的な次元の説明になるのであるが(Skibo and Schiffer 2008)。

さて10年近い技術論における沈黙を破ってルモニエ氏が発表したのが『ありふれたモノ：物質性と非言語的コミュニケーション』(2012)である。その中でかつてM.ゴドリエ(1976)らと調査したニューギニア高地民における住居、鰻罟、太鼓、そして垣根などを彼らが作り続ける意味について問い直した。さらにこの本ではレーシングカーやその模型など現代の西欧社会におけるモノについても比較考察を行っている。そしてここに翻訳した論考ではその著作の骨子をタコラと呼ばれる垣根作りに絞って論じたものである。

『ありふれたモノ』については*Hau: Journal of Ethnographic Theory*誌の4巻1号にて「Book Symposium」と称してB.ラトゥール、C.バラード(Ballard)、T.インゴルド、S.クフラー(Küchler)らによって書評が寄せられ、それに対してルモニエ氏が「モノの混合する力」という応答の論考を書いている(2014)。書評の多くはルモニエ氏が提唱した共鳴者(resonator)という概念を巡ったものである。これは物質文化を集団のアイデンティティやジェンダー関係を象徴するものとして捉えるのではなく、モノが日常的な社会实践の必要不可欠な要素としてさまざまな社会的メッセージと共鳴するといった考え方である。これはラトゥールのいうモノと人間のハイブリッド性、あるいはインゴルドのいう束ね(bundling)理論(Ingold 2013)、あるいはE.ハチンスのいう「物質的錨」(Hutchins 2005)などと同じような指向性をもった概念である。

今後これらの諸概念がどのように比較あるいは統合されていくか注目すべきであるが、人類学の技術論あるいはマテリアリティ論においてルモニエ氏のこの著作は参照必須の業績とされることはまちがいないと思われる。そしてここに訳出した本論文はそのよき導入の位置づけになる。

(後藤 明)

参考文献

Audouze, Françoise

1999 "New advance in French prehistory," *Antiquity* 73: 167-175.

2002 "Leroi-Gourhan, a philosopher of technique and evolution," *Journal of Archaeological Reserach* 10(4): 277-306.

Creswell, Robert

1990 "'A new technology" revisited," *Archaeological Review of Cambridge* 9(1): 39-54.

Dobres, Marcia-Anne

1999 "Technology's links and chaînes: the processual unfolding of technique and technician," In M.Dobres and C.R. Hoffman (eds.), *The Social Dynamics of Technology*, pp. 124-146. Washington D.C.: Smithsonian Institution Press.

2000 *Technology and Social Agency*. London: Blackwell.

ゴドリエ、モーリス

1976 「ニューギニア・バルヤ族における《塩の貨幣》と商品流通」M.ゴドリエ『人類学の地平と針路』(山内 訳)、pp.219-258、紀伊国屋書店。

後藤 明

2012 「技術人類学の画期としての1993年：フランス技術人類学のシェーン・オペラトワール論再考」『文化人類学』77(1): 41-59.

2014 「現代のモノ作り論からみた技術と学習に関する研究ノート」『交代劇：A-02 班研究報告書』4: 87-114.

Harris, Marvin

1964 *The Nature of Cultural Things*. New York: Random House.

Hutchins, Edwin

2005 "Material anchor for conceptual blends," *Journal of Pragmatics* 37: 1555-1577.

Hodder, Ian

1982 *Symbols in Action*. Cambridge: Cambridge University Press.

Ingold, Tim

1990 "Society, nature and the concept of technology," *Archaeological Review from Cambridge* 9(1): 5-17.

1993 "Tool-use, sociality and intelligence," In K.R. Gibson and T. Ingold (eds.), *Tools, Language, and Cognition in Human Evolution*, pp. 429-445. Cambridge: Cambridge University Press.

2013 *Making: Anthropology, Archaeology, Art and Architecture*, London: Routledge.

Latour, Bruno and Pierre Lemonnier (eds.)

1994 *De la Préhistoire aux Missile Balistiques: L'Intelligence Sociale des Techniques*, Paris: Découvert.

Lemonnier, Pierre

1980 *Les Salines de L'Ouest: Logique Technique, Logique Social*, Paris: Editions de la Maison des Sciences de L'Homme.

1986 "The study of material culture today: towards an anthropology of techniques," *Journal of Anthropological Archaeology* 5: 147-186.

1989 "Bark capes, arrowheads and Concorde: on social representations of technology," In I. Hodder (ed.) *The Meaning of Things: Material Culture and Symbolic Expression*, pp. 156-171, London: Routledge.

- 1990a “Topsy turvy techniques: remarks on the social representation of techniques,” *Archaeological Review from Cambridge* 9(1): 27-37.
- 1990b *Guerres et Festins: Paix, Échnages et Compétition dans les Hautes Terres de Nouvelle-Guinée*, Paris: Edition de la Mqaison des Sciences de l’Homme.
- 1992 *Elements for an Anthropology of Technology*, Anthropological Papers 88, Museum of Anthropology, University of Michigan.
- 2006 *Le Sabbat des Lucioles: Sorcellerie, Chamnisme et Imaginaire Cannibale en Nouvelle-Guinée*, Paris: Stock.
- 2012 *Mundane Objects: Materiality and Non-Verbal Communication*, Walnut Creek: Left Coast Press.
- 2014 “The blending power of things,” *Hau: Journal of Ethnographic Theory* 4(1): 537-548.
- Lemonnier, Pierre (ed.)
- 1993 *Technological Choices: Transformation in Material Culture since the Neolithic*. London: Routledge.
- Leroi-Gouhan, André
- 1964 *Le Geste et la Parole, Vol 1: Technique et Langage*, Paris: Albiin Michel.
- 1965 *Le Geste et la Parole, Vol 2: La Mémoire et les Ryhmes*, Paris: Albiin Michel.
- 1973 『身ぶりとことば』(荒木亨訳)、言叢社。
- 1988 *Hand und Wort: Die Evlution von Technik, Sprache und Kunst*, Suhrkamp: Frankfurt.
- 1993 *Gesture and Speech*, Cambridge: The MIT Press.
- 2007 『動作と言葉』(高橋壮訳)、あるむ。
- Naji, Myriem and Laurene Douny
- 2009 “Editorial,” *Journal of Material Culture* 14: 411-432.
- Sackett, James R.
- 1986 “Isochrestism and style: a clarification,” *Journal of Anthropological Archaeology* 5:266-277.
- Schiffer, Michael B.
- 1976 *Behavioral Archaeology*, New York: Academic Press.
- 1994 “A book review on “Elements for an Anthropology of Technology.”,” *American Anthropologist* 96: 202-204.
- 1995 “Behavioral chain analyses: activities, organization, and the use of space,” In M.B. Schiffer, *Behavioral Arcaheology: First Principles*, pp.55-66. Salt Lake City: University of Utah Press.
- 1990 “Techniques as human action: two perspectives,” *Archaeological Review from Cambridge* 9(1): 18-26.
- 1994 “Mindful technology: unleashing the chaîne opératoire for an archaeology of mind,” In Renfrew, C. and B. Zubrow (eds.), *The Ancient Mind*, pp.143-151. Cambridge: Cambridge UP.
- 2005 “The chaîne opératoire,” In Renfrew, C. and P. Bahn (eds.), *Archaeology: the Key Concepts*, pp. 159-163, London: Routledge.
- Sigaut, François
- 1985 “More (and enough) on technology!” *History and Technology* 2: 115-132.
- 1994 “Technology,” In T. Ingold (ed.), *Companion Encyclopedia of Anthropology*, pp. 420-459, London: Routledge.
- Skibo, James M. and Michael B. Schiffer
- 2008 *People and Things: A Behavioral Approach to Material Culture*, New York:

Springer.

Wiessner, Polly

1984 "Reconsidering the behavioral basis for style: a case study among the Kalahari San," *Journal of Anthropological Archaeology* 3:190-234.

Wobst, H. Martin

1977 "Stylistic behavior and information exchange," In C.E. Cleland (ed.), *Papers for the Director: Research Essays in Honor of James B. Griffin*, pp.317-342, Ann Arbor: University of Michigan.